



# 岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

モルヒネ耐性および依存における脳内オピオイド受容体の変化に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 宗一郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/118">http://hdl.handle.net/20.500.12099/118</a>

## はしがき

癌性疼痛患者のquality of lifeの向上を目指したWHO方式3段階癌疼痛治療法が1987年に発表された。この治療法によれば、基本的に第1段階として、軽度の痛みに対して非ステロイド性抗炎症薬とアセトアミノフェンを、第2段階として、軽度から中等度の痛みに対してコデインクラスの弱作用性オピオイド鎮痛薬を、第3段階として中等度から高度の痛みにはモルヒネクラスの強作用性オピオイド鎮痛薬を勧めている。この中で最も重要な役割をもつのはモルヒネを代表とするオピオイド鎮痛薬であり、わが国においても癌性疼痛の治療に硫酸モルヒネ徐放錠が普及するようになった。

モルヒネをはじめとする麻薬類は、その主作用である鎮痛効果に対して強い耐性を生じ、また身体的および精神的依存をもたらし、さらには薬物投与の中断で禁断症状が発現する。しかし、これらの有害作用は癌性疼痛患者では出現し難いともいわれ、モルヒネなどによる耐性および依存性形成のメカニズムは現在でもなお不明な部分が多い。麻薬類のこのような耐性および依存性形成機構として、生体側の薬物感受性の変化がその原因と考えられ、麻薬（オピオイド）受容体レベルで説明しようとする報告もされている。

今回の科学研究費、一般研究（C）による「モルヒネ耐性および依存における脳内オピオイド受容体の変化に関する研究」の研究成果報告書はこれらのことを基盤として実験を計画し、平成4年度から平成5年度の2年間にわたっておこなった成果である。

## 研究組織

研究代表者：太田宗一郎（岐阜大学医学部・講師）

研究分担者：丹羽雅之（岐阜大学医学部・講師）  
：下中浩之（岐阜大学医学部・助教授）  
：野崎正勝（岐阜大学医学部・助教授）  
：土肥修司（岐阜大学医学部・教授）

## 研究経費

平成4年度 1200 千円

平成5年度 900 千円

計 2100 千円